第 15 回　これからの学術情報システム構築検討委員会　議事要旨

1. 日時：平成 28 年 10 月 20 日（木）14：00～17：00

2. 場所：学術総合センター　20 階　実習室 1

3. 出席者：

（委員）

佐藤　義則　　東北学院大学 文学部 教授

熊渕　智行　　東京大学附属図書館 情報管理課長

甲斐　重武　　京都大学附属図書館 事務部長

山田　奈々　　青森県立保健大学 図書課 主査

原　　修　　立教大学図書館 利用支援課 課長

近藤　茂生　　立命館大学図書館 学術情報部 次長

小山　憲司　　中央大学 文学部 教授

細川　聖二　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長

吉田　幸苗　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（欠席）

渡邉　俊彦　　鹿児島大学 学術情報部長

呑海　沙織　　筑波大学 図書館情報メディア系 教授

大向　一輝　　国立情報学研究所 コンテンツ科学系 准教授／学術基盤推進部 学術コンテンツ課 コンテンツシステム開発室長・図書室長

（陪席）

小野　亘　　東京学芸大学 教育研究支援部 学術情報課長

佐藤　初美　　筑波大学 学術情報部 アカデミックサポート課長

酒井　清彦　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長

（事務局）

上村　順一　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
学術コンテンツ整備チーム係長（CiNii/新 CAT 担当）

阪口　幸治　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
学術コンテンツ整備チーム係長（CAT/ILL 担当）

古橋　英枝　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
学術コンテンツ整備チーム係員（CAT/ILL 担当）

＜配付資料＞

委員名簿

1.　第 14 回これからの学術情報システム構築検討委員会議事要旨（案）
2-1.　平成 28 年度電子リソースデータ共有作業部会の活動経過報告
2-2.　電子リソース管理システムの利用可能性の検証について（平成 28 年度中間報告）
2-3.　海外出張（Orbis Cascade Alliance 視察）企画書
3-1.　NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（NACSIS-CAT 詳細案）
3-2.　2020 年以降のシステム全体図
3-3.　2020 年以降のシステム全体図（用語定義表）
4.　VIAF への正式参加について
5.　「これからの学術情報システム構築検討委員会」課題整理【まとめ】
6.　第 18 回図書館総合展
　NII フォーラム「NACSIS-CAT/ILL と電子リソース：2020 年の学術情報システム」

参考資料

1.　VIAF 参加協議の開始について

4.　議事：

議事に先立ち、細川委員より 10/16(日)に開催された全国図書館大会について報告があった。

（1）前回（第 14 回）委員会の議事要旨確認

メール審議を経て 7/14 付で確定したため、委員会内での確認は割愛した。

（2）平成 28 年度電子リソースデータ共有作業部会の活動経過報告（報告）

小野電子リソースデータ共有作業部会主査から資料 2-1 の下線部を中心に前回委員会からの進捗状況について報告があった。続けて電子リソース管理システムの検証及び国際連携に関して、資料 2-2・2-3 に基づいて報告があった。

審議の結果、ERDB-JP 及び電子リソース管理システムの検証にかかる今後の活動計画については、委員からの意見を反映し、次回報告することとなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

[資料 2-1 について]

- メタタグ及び sitemap に対応した結果、Google で表示される対象はどのページか。
  - ERDB-JP のページを想定している。
- CiNii 学術刊行物ディレクトリの代替ページの作成とはどういう意味か。
  - NII-ELS の終了に伴い当該ページも提供が終了となるため、代替ページの用意を検討している。
- パートナーの拡大後に具体的な反応は何かあったか。
  - 問い合わせは特に発生していない。サンメディアとユサコが新規に参加した。

- ERDB-JP のコンテンツ数はどの程度を目指しているのか。
  - 現時点で搭載すべき母数は把握できていない。
  - 対象コンテンツの洗い出しと、未収録コンテンツの登録のためにどの程度パートナーを拡大すべきなのか、という明示的な目標を次回は示してほしい。

[資料 2-2・2-3 について]

- 360 Resource Manager Consortium Edition /Alma ともに報告書には、評価基準となりうる利用のモデルケースを記載してほしい。そのモデルケースの実現と対照して各機能の有効・無効を評価する必要がある。
  - 次回提出時には追記するようにする。
- 海外コンソーシアムの場合はコンソーシアム内で同一パッケージを導入するのが前提になっているが、JUSTICE の場合は交渉されたパッケージをそのまま契約する機関の方が少数である。そういった国内の特性を前提にした検証項目を設定した方がよいのではないか。またそのような観点でも海外調査を行ってはどうか。
  - 検証項目の見直しを検討する。

（３）NACSIS-CAT/ILL の再構築の詳細案について（審議）

佐藤 NACSIS-CAT 検討作業部会主査より、資料 3-1～3-3 に基づいて「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化」のうち、NACSIS-CAT の詳細案について報告があった。

審議の結果、作業部会で引き続き検討を進め、必要に応じてメール審議を経て、次回委員会で最終版を提示することとなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

- 参照 MARC が残り、書誌修正も可能となると書誌の作成単位を出版物理単位に変更する程度で、現在の運用と大きくは変わらない印象を受けた。一方で既存書誌の構造が変わらないことによって、同一セットの図書同士で構造の異なる書誌が存在することになり、判断の複雑さを感じた。
  - 所蔵データを出版物理単位に合わせて遡及的に分割する、というのは実際には難しい。書誌に登録されている VOL と所蔵データが 1 対 1 対応していない実データは相当数存在している。
- 参照 MARC を残さなければならない理由が不明瞭で、かつどの程度流用登録が発生するのかが明確でないと全体像が把握できない。整理をして提示してほしい。
  - 外部機関作成書誌データがあれば使う、なければ作る、というシンプルな見た目の方がよいのではないか。
    - 参照 MARC や流用といった表現自体を削った方がよいという意味か。
    - 流用というのは操作に対する表現なので方針を示す文書に記載しなくてもよいのではないか。
    - 記述については再度検討する。
- 「基本的に書誌データの構造は変わらない」というのはデータ項目に変化がないと

いう意味か。

- 大幅な変更は想定していない。多少の追加は今後の検討次第でありうる。

- 「重複を認めない」という記述が残っていると、書誌作成の前作業として、入念な書誌検索を求めている、従来と同じ運用だという理解になってしまうのではないか。
  - 重複を認めないので作らないように、ではなく、重複を認めないので複数存在する場合には後からシステムで統合される、という意図で記載している。
  - 表現を変更する必要があるのではないか。
  - 検討する。

（4）VIAF への正式参加について（審議）

事務局より、資料 4 に基づいて VIAF への正式参加について提案があった。

審議の結果、提案のとおり手続きを進めることとなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

- 参加にあたって必要な経費はあるのか。
  - 特に必要ない。
- 参加の主体はどこになるのか。
  - 国立情報学研究所として参加する。
- VIAF のデータ活用についてはどのように考えているのか。
  - 委員会または NACSIS-CAT 検討作業部会での検討内容だと考えている。

（5）今後の学術情報システム構築検討に係る課題整理

佐藤委員長より、資料 5 に関して再整理の提案があった。

審議の結果、今回提案のあった「協力体制の確立」「総合的発見環境」「コレクション」について次回以降検討を進めていくこととなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

- NACSIS-CAT/ILL については JUSTICE や JPCOAR のようなコミュニティが存在しておらず、意思決定機関がない。今後組織作りが必要なのではないか。
  - JUSTICE・JPCOAR に続いて、となると特に参加費用に関して負担に感じる参加館が出てくるのではないか。事務局の維持についても、各機関がどのように支援していけるのか検討が必要だと感じている。
  - 拠出金額の用途が明瞭かつ参加のメリットが感じられるのであれば支払うことに抵抗はないのではないか。
  - NACSIS-CAT については 30 年間無料だった実績があり、少なくとも金額的に今よりも安くなる、という議論にはならない。
  - しかし一方で無料である以上いつ停止しても不思議ではないのも事実である。停止させないための参加館からの意思表明の一つとして一定額支払うというの

は考えられるのではないか。

- 地域ごとのサポート体制やコミュニティも作ってもらえるのであればメリットが感じられるのではないか。
- NACSIS-CATの参加館には大学以外に高専や共同利用機関、一部の公共図書館、病院図書室、海外機関もいる。あらゆる参加館が理解できるような形で進めていく必要がある。

- 従来の NACSIS-CAT は共同目録システムで、所蔵はあくまでも個々の機関でデータを付与するだけだったが、今後は電子資料も含めて共同構築するコレクションというものがその上に出来つつある。そういった共同プロジェクトへの参加費という考え方もあるのではないか。
  - 2 年前に整理した時点では「デジタイズ」という名称で課題整理をしたが、今後は「コレクション」という名称で検討を進める必要がある。
- ILL の電子ファイル提供についても、国際標準から遅れている点が長年の懸案である。
  - 著作権料を支払ってでも入手したい、という要望もあるかもしれない。
  - 本委員会で検討して推進会議に提案し、最終的に国公私協力委員会からしかるべき機関に要請していただく、ということも考えられる。
- 総合的発見環境についても議論が必要である。
  - システム構築という意味ではディスカバリ・サービスと変わらないが、重要なことはシステム構築ではなく、そういった環境を業界全体としてどう仕組み作りをしていくのか、という検討を本委員会では進める必要があると認識している。
  - 2 年前に整理した時点で具体的にブレークダウンして前に進めることができる対象が NACSIS-CAT であり、ERDB-JP であった。再度全体を俯瞰し、次の目標設定をするタイミングなのではないか。

（6）その他

事務局より、資料 6 に基づき、今年度の図書館総合展のプログラムについて説明があった。

以上